

「交流と講演のつどい」

わたしたちの願い

1. わたしたちは子ども達に、ほんものを見抜く力、美しいものや人間にとって大切なことを豊かに感じ取る力、粘り強く追求していく力を育てたいと思っています。
～このような力の芽は、どの子にも潜んでいます。子ども自身が自由に活動するなかで、そのような芽はどんどん育っていくものです。
2. わたしたちは、子ども達がお互いに活発に働きかけ合い、ともに磨き合うようになって欲しいと思っています。
～誰もが基本的な人権を持っていて、誰もそれを否定したり、傷つけたりしてはならないことを心に刻んでほしいのです。
3. そのために、お互いのよいところを認め合い、率直にしかも暖かく批判し合い、力を合わせて成し遂げるような活動を作り出すように努力します。

ホームページ：「北海道自由が丘学園の願い」より

【第1部】

- ◇ と き：2013年9月28日（土）、受付12時30分、13時～18時
- ◇ ところ：北海道自由が丘学園月寒センター
- ◇ プログラム
 - 1) 講演「私達の実践から展望する教育改革」、13:00～14:15(後半交換外)
～講師/鈴木秀一・北大名誉教授、/吉野正敏・NPO 自由が丘理事長
 - 2) 会員、支援者スピーチ「これからの時代、私の教育提言」、14:30～15:30
～NPO 役員、会員、大学人、研究者、市民の皆さん
 - 3) 卒業生トーク「自由が丘で得たもの、今の生き方」、15:40～16:30
～夕張・月寒の思い出、スタッフへの一言、近況紹介…
 - 4) フリー交流会、16:45～18:00
～軽食、飲み物用意。希望者パフォームなど *一部記念映像、音楽(予定)

【第2部】

- ◇ と き：2013年9月25日（水）、11時30分～14時30分
- ◇ プログラム *午前は11:30～12:30、午後は13:30～14:30 予定、当日ℓⅴⅴ もあります。
 - 1) 教育大学釧路校、授業開発研究室の公開実習 ～理科又は社会科等の持ち込み授業
 - 2) スクール生徒の発表、展示 ～総合型学習/表現科、地球に生きる科など

「主催」

NPO 法人北海道自由が丘学園・ともに人間教育をすすめる会（自由が丘月寒スクール）

「共催」

自由が丘教育と協同の研究所、北海道自由が丘学園をつくる会

〒062-0051 札幌市豊平区月寒東1条15丁目15-11 TEL011-858-1711、FAX011-858-1333

ホームページ：<http://www.hokjioka.net>

教育実践年 15 年の歩み、意味、社会的役割など

NPO 法人・北海道自由が丘学園 吉野 正敏

I. プロローグ：創立期から

北海道自由が丘学園の前身は 1996 年の『新しい教育・学校をめざす研究会』に始まります。言うまでもなく教育制度はその国・社会の価値観を反映します。第 2 次世界大戦が 1945 年に終結し、敗戦下の日本は主権在民・平和主義・基本的人権尊重という民主主義を志向する新憲法のもとで社会は復興を推進していきますが、同時に「高度」経済成長がもたらす大量生産・消費・廃棄という仕組み（今日の表現では環境への過重負荷・自然や地域破壊）や弱肉強食的な競争原理が人々の生活を席卷した時代でした。教育現場では点数序列・学歴偏重の評価システムや集権的管理・画一主義が主流となり、そこから学級崩壊・校内暴力・不登校・中退などが多発していました。これらの多くはいじめ・体罰などもあわせ現在も続いている問題です。

自由が丘は、学校は誰のためにあるのか、そこで大切なものは何かを問い直し、子どもや若者が人として学び成長するために大事な教育理念と運営のあり方を提案したのです。1991 年『北海道自由が丘学園をつくる会』を立ち上げ、先進的な事例を参考にしながら、学校は何よりも“子ども達が主人公＝主体”であり、多くの地域市民が集い共に学びあう場を“協同の知恵と力で設立していく”ことを掲げました。

II. 市民立による“自由と協同の学び舎づくり”：『ヒューマン・トラスト運動』

当時、学力を暗記型知識のみで判断せずに体験・協同作業を通じて多様な可能性を追求するような教育実践には、埼玉・自由の森学園中学高校、市民と共に学びの共同体を志向する愛知・黄柳野高校、ニールの自由観とプロジェクト型教科を柱とする和歌山・きのくにこどもの村小中学校などがありました。

自由が丘も北海道の地で“人間形成的教育の場”を目指すため、札幌での教育実践と普及活動をスタートしました。（センター施設確保、「いきいき教室」、フリースクール、通信「教育のフォロントピア」、書籍発行、教育集会）1995 年『設立準備委員会』を設置して公開方針と法人認可を準備しながら、多くの賛同者と支援寄金を集約していき、並行して適地模索や近郊自治体との接触を重ねました。（札幌市内～近郊地域、江別市、石狩市など）

そして 97 年、発起人 50 余名と賛同者 3,000 名のもとに夕張市と「協定書」締結による現地廃校舎借用に迫り着きました。しかし記者会見を行った 2 週間後に拓銀・山一破産を端緒とするバブル崩壊が拡大したのです。目標とする寄金確保は困難となり、方針修正を迫られながらも、98 年春に認可前の『自由が丘夕張プレスクール』を開校しました。（道内と本州から生徒約 20 名が公営住宅に寄宿。当時はマスコミ各社報道／全国三大新聞、日経、道新、TV／NHK、道内各社ラジオ・雑誌等取材～1 年前後続く**、2 年目から旧市街にある元旅館を入手し寄宿舎生活を持續）

ここではスタッフと生徒達、地元住民との交流など貴重な実践を 5 年半ほど重ねました。以下はその骨子です。

○**生徒**：中学生中心に時に小学生や中卒者。当初不登校生は半分位、小規模・個性伸長を期待する者は中 1 から入学。面談と体験入学を経て入学。在籍 2～3 年（最長 5 年）。運営はミーティングにて生徒参画、行事も一緒に組み立て。

○**学校**：木造旧小学校で無学年オープン型カリキュラム。一斉教科と個別サポート組合せ。テーマプロジェクト/工作・表現・料理等、地域社会体験/農業・保育所・老人ホーム/入居。時に余市等での実習・地元有志のゲスト授業。更に年 4 回各 1 週間、毎回約 10 名の教育大釧路校の学生教官による総合学習型授業&行事。

○**生活**：札幌市十区館・北見・帯広・留萌や青森・山形・宮城・茨城・埼玉・神奈川・東京・大阪から受入れ。2 人相部屋、スタッフが替わりで寝食を共に食事や掃除・雪かきを分担。札幌組は金曜夕方と月曜に車両送迎。道内遠方組は月次 1 回、道外者は学期区切りに帰省。映画祭など地元イベントにも参加。学期毎の父母会。

○**スタッフ**：当初は鈴木代表+元教師と新卒*。その後社会人や学生参加（そこから夫婦になったり別人生を歩む者・）。地元籍パートさん採用。札幌本部/普及・募集・財務等。時に外部から体験寄留者受入（松下政経塾生、大学院生）

*：先生と呼ばずにさん付けかニックネーム。**：マスコミは「制服なし、校則なし、チャイムなし」に注目、冬の寄宿舎生活も取材。

しかしながら法人認可には資金 10 億円が必要であり、資金不足から 3 年目に使用施設からの立ち退きを迫られました。（地元署名数千名を集め延期申請）当時は特区制度もない中で、設立準備委員会は「中学に代替する高等専修学校案」提示（→自治体一旦了承後不同意）などを経て 4 年目から元家具店に移転し「自力」を図ったのです。

これらの実践は、書籍『陽はまた昇る』（04 年、高文堂出版、p9 参照）に収められています。

私達の教育・学校づくりは、特定スポンサーに拠るのではなく、多くの市民の協同でなしとげようというもので、具体的には①個人寄金は 1 口 1 万円、②法人は 10 口、③小口や共同拠出も可能、④ワーク参加、⑤備品教材提供、など多様な参加形態により、未来に生きる子ども達を皆で支え合おうという取り組みでした。その趣旨を当時の知床保護のナショナルトラスト運動に倣って『ヒューマン・トラスト運動』と表現しました。（実際には、賛同者 5,000 名結集。著名人からは、故黒柳朝・岡本富士太・山田洋次・湯川れい子・故佐藤忠良・故三浦綾子・加藤多一さんらの講演や来訪・メッセージなどを頂く。地元では町内会・商店街や縁のあった沢山の住民からのご厚意を受けました。又、開校後は各地自治体・PTA・教員組織等の訪問が数百名に及ぶ）

以上の試行と実践の中からの教訓には、この教育実践が、(1)子ども達が“自ら学び成長する場づくり”、(2)市民社会に開かれた「地域学校」、(3)大学研究者等との連携／特に教育大学との一種の「実験学校」があげられ、これらは様々な「普及協同活動」とあわせて夕張以降の活動の要となっていきます。

III. 教育ネットワーク：共育の森学園、民間教育団体とのつながり

03 年秋、法人認可の見通しが立たない中で自由が丘本部のあった札幌豊平区に『自由が丘月寒スクール』として移転し、NPO 法人格を取得して現在に至っています。（夕張スクール生徒も遠方者は学生会館や下宿しながら通学、既に「子ども館・文化センター」が稼働しており、数年後は全体として 40～50 名規模の小中学生が在籍）

ここは 3 階建 120 坪の施設での日常活動に加えて、自然・地域体験先に NPO 余市教育福祉村との交流、北海道教育大釧路校からの継続的出前実習、北星大学等の実習や学生・社会人ボランティア受入れの場であり、更にそれらの普及活動（NPO 会員向月次通信、独自集会、相談会等）や教育団体（道民教、札幌教育フェスタ、明峰高等学校他）との連携を進めました。また、環境教育の一環から導入した木質ペレットストーブによる建物全体暖房と 09 年ソーラーパネル設置等の自然エネルギー・省エネルギーによる本部施設の『エコハウス(スクール)』展開は、温暖化対策=70%CO2 削減・地域市民への公開サテライトなどにより 10 年北海道「グリーンビズ事業所認定*」、12 年札幌市「環境賞優秀賞*」を受けました。* 当該年度では NPO 法人で唯一受賞。

以下は私たちが 15 年間を通じて追求してきた各種ネットワークの取り組みです。

◇ 教育団体との協同：

兼ねてより道民教の分科会世話人/不登校、学力。この 2 年間は連続して夏季全道集会和び春季学習会会場に共育の森学園を提供。スタッフは事務局と一体となり運営支援（元々、鈴木さんが歴代会長の一人）

札幌子育て教育フェスタの秋季集会に実行委員参加/分科会等受け持ち（15 回目、初期実行委員長は鈴木さん）

◇ 大学研究者との協同：

教育大釧路校教育内容方法研究室（倉賀野教授他）の実習に併せて授業検討会・教師塾を開催。学生とスタッフによる研修・研鑽は年次 10～15 回。札幌学院大（富田ゼミ）は毎年の実習時に交流。

◇ 学校法人との協同：

07 年、小樽の学校法人の民事再生法適用に伴い、自由が丘の関係者が新理事・評議員となり高校・看護専門学校

◇ 自然エネルギー普及：

NPO 法人新エネルギー普及促進協会（NEPA）と協賛し連続講座企画/講師分担・見学会場提供。サテライトは随時見学者受入れ/ガイド、ペレットストーブ設置コンサル+設置取付け手配。関連団体 NERC とも適宜情報交換。

◇ 地元、各団体：

中小企業家同友会/経営者有志と本部幹部は自由が丘運動に多数発起人参加、その後も有力企業より支援継続。企業により社員教育や研修会に講師対応。大田亮さん映画上映会は共同呼び掛け/札幌・小樽支部など。

NPO 余市教育福祉村（農場にて子ども若者の体験自立支援）/姉妹組織として創立以来連携し毎年農業実習や地域体験を持續中。科学者会議・地域自治体問題研究所/会員（役員）参加+適宜業協協力。FS 等ネットワーク/当初創立に関与。会員として、普及・行政対応や相互の生徒交流イベント実施。